

WebSphere® Everyplace™ Server
バージョン 2.1



Everyplace Cookie Proxy
ユーザーズ・ガイド

注

本書の情報およびそれによってサポートされる製品を使用する前に、19ページの『特記事項』に記載する一般情報をお読みください。

本書の内容は、新版で特に指定が無い限り、WebSphere® Everyplace Server バージョン 2 リリース 1 での Everyplace Cookie Proxy のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

原 典： WebSphere® Everyplace™ Server Version 2.1
Everyplace Cookie Proxy User's Guide

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2001.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2001. All rights reserved.

Translation: © Copyright IBM Japan 2001

目次

本書について	v
本書の構成	v
第1章 Everyplace Cookie Proxy の紹介	1
Everyplace Cookie Proxy の動作	2
Cookie	2
セッション管理	2
基本認証	3
パフォーマンスとスケーラビリティ	3
サポートされるデバイス	3
サポートされるマークアップ言語	3
セキュリティ考慮事項	4
制限	4
第2章 Everyplace Cookie Proxy のインストールおよびアンインストール	5
ハードウェア要件	5
ソフトウェア要件	5
必要なディスク・スペース	5
Everyplace Cookie Proxy のインストール	6
AIX システムの場合	6
Solaris システムの場合	6
Everyplace Cookie Proxy のアンインストール	6
AIX システムの場合	6
Solaris システムの場合	7
第3章 プロキシの管理および構成	9
Edge Server Caching Proxy の構成	9
Everyplace Cookie Proxy の構成	10
ログインのカスタマイズ	12
カスタマイズ・エラー・メッセージ	13
Everyplace Cookie Proxy の使用により Web アプリケーションへのアクセスを得る	14
プロキシの始動および停止	14
ロギング	15
Solaris ユーザーのための注意事項	16
トラブルシューティング	16
Web ブラウザーでのエラー・メッセージ	16
「JPAS100E Cookie Proxy: アクティブではありません」エラー・メッセージ	16
特記事項	19
商標	20

本書について

Everyplace Cookie Proxy は WebSphere Edge Server Caching Proxy 用のプラグイン・ソフトウェアです。本書には、Everyplace Cookie Proxy の一般的な説明と、そのインストール、構成、およびアンインストールの手順についての説明があります。

本書の構成

本書は、以下の章で構成されています。

- 1ページの『第1章 Everyplace Cookie Proxy の紹介』では、Everyplace Cookie Proxy とその機能について説明しています。
- 5ページの『第2章 Everyplace Cookie Proxy のインストールおよびアンインストール』では、AIX または Solaris システムでの Everyplace Cookie Proxy のインストール方法およびアンインストール方法について説明しています。
- 9ページの『第3章 プロキシの管理および構成』では、Everyplace Cookie Proxy および Edge Server Caching Proxy の構成方法、およびエラー・ログについて説明しています。

第1章 Everyplace Cookie Proxy の紹介

ワイヤレス・インターネット・サービス (携帯電話などのワイヤレス・デバイスを通じたインターネットへのアクセスを提供するサービス) の加入者数は、日本ではここ数年急速に増加してきています。日本最大の携帯電話会社が 1999 年 2 月にワイヤレス・インターネット・サービスを開始して以来、加入者数は一日に 25,000 人増加したことになり、現在も成長は続いています。

ワイヤレス・デバイスの Web ブラウザーには、多くの問題があります。

問題	説明
Cookie がサポートされていない。	cookie を使用する Web アプリケーションをこの大規模な市場のために開発できず、cookie に頼る既存のサービス方法が使用できません。
Web ブラウザーが、認証後でも基本認証のためのユーザー ID またはパスワードを覚えられない。	Web サイトのハイパーリンクをクリックするときなど、HTTP 要求を実行依頼するときは毎回、ユーザー ID とパスワードを入力しなければなりません。
Web アプリケーションがユーザーを識別できるようにするために使用可能な IP アドレスその他の情報 (電話番号など) がない。 ¹	この理由からセッションを維持することができないため、個人情報設定サービスなどのセッション・ベースの Web アプリケーションを開発または使用できません。
入力した文字がアスタリスクでのみ入力フィールドに表示されるため、パスワードの入力が難しい。	一般の携帯電話には、ダイヤル用の 10 個の数字キーと、3 または 4 のライティング・システムおよび特殊文字が多重定義された他のキーがいくつかあるだけです。その結果、最大 5 つのかな文字が入力用の各キーに割り当てられることとなります。

これらの問題は Everyplace™ Cookie Proxy (以後 Cookie Proxy と呼びます) で解決されます。このソフトウェアは、WebSphere® Edge Server Caching Proxy (以後 Edge Server Caching Proxy と呼びます) のプラグインです。Edge Server Caching Proxy は IBM® WebSphere Everyplace Server (以後 Everyplace Server と呼びます) のコンポーネントです。

WebSphere Portal Server は、セッション管理に cookie を使用するソフトウェアの例です。

プロキシ・サービスの一部として、Cookie Proxy は、機能に制限のある Web ブラウザーに代わって重要な情報を保管します。これには、セッション管理および基本認証のために使用される cookie 値その他の値が含まれます。Cookie Proxy はまた、カスタマイズ可能なログイン・フォームを提供することで、Web アプリケーションの使用可能性を向上させます。

1. 携帯電話会社の公式サイトが、ユーザーのデバイスの識別に使用できる場合があります。

一般的な構成を図 1 に示します。この例では、認証は IBM WebSphere Everyplace Server (以後 Everyplace Server と呼びます) のコンポーネントである Everyplace Authentication Server (以後 Authentication Server と呼びます) が処理します。

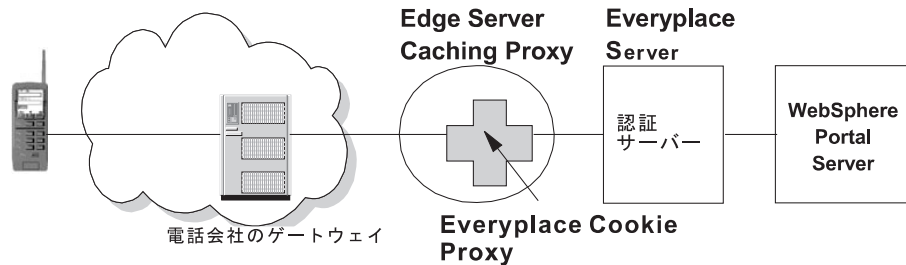


図 1. システムに対する Everyplace Cookie Proxy の関係: 例

Everyplace Cookie Proxy の動作

Cookie

HTTP 応答がダウンロードされる時、Cookie Proxy はそのヘッダーを読み取り、cookie 値 (name=value のペア、パスと満了データ) をそれ自体のテーブルに保管します。次に、Web ブラウザーが HTTP 要求を Web サーバーに発行すると、Cookie Proxy は保管された cookie 値を検索し、これを要求ヘッダーに追加し、要求をバックエンド・サーバーに渡します。

注: Cookie Proxy は cookie の有効期限値を、そのテーブルに保管されるときのみ検査し、それが検索されるときには検査しません。保管された cookie 値は、セッションがクリーンアップ・デーモンによってクリーンアップされるまで、Cookie Proxy のテーブルに残ります。これは、cookie エントリがテーブルに残っている間 cookie はバックエンド・サーバーに渡され、有効期限のモニターはバックエンド・サーバーが担当することを意味します。

セッション管理

ユーザーがセッション中に初めて (またはこのユーザーが最後にこのアプリケーションにアクセスして以降のタイムアウト遅延の満了後に) Web アプリケーションにアクセスしようとしたとき、Cookie Proxy はセッション ID を生成します。URL のホスト名が、バックエンド・サーバーまたは Cookie Proxy のホスト名である場合、このセッション ID が HTTP 応答内のハイパーリンクの URL に追加されます。HTTP 要求が実行依頼されるたびに、Cookie Proxy は着信セッション ID が有効であるかを検査します。このセッション情報は、セッション・クリーンアップ・デーモンが除去するまで Cookie Proxy のテーブルに保管されます。セッション有効期限およびクリーンアップ間隔は、Cookie Proxy の構成中に定義することができます。

基本認証

Web ブラウザーが HTTP 要求を実行依頼し、バックエンド・サーバーが基本認証を要求するが、Cookie Proxy がまだ有効なユーザー ID とパスワードを保管していない場合、Cookie Proxy はログイン・フォームを Web ブラウザーに送信します。(このフォームは、バックエンドの Web アプリケーション開発者または Cookie Proxy をセットアップする管理者がカスタマイズすることができます。)ユーザーがログインするとき、Cookie Proxy は HTTP 要求の本体を読み取り、ユーザー ID とパスワードを保管します。この後、残りのセッション全体を通じて、ブラウザーが HTTP 要求を実行するときは必ず、Cookie Proxy はユーザー ID とパスワードを検索し、レルムが構成ファイルで指定されている場合はユーザー ID の後にデフォルト・レルムを追加し、結果のストリングを BASE64 を使用してエンコードし、要求ヘッダーにストリングを追加し、ヘッダーをバックエンド・サーバーに渡します。

パフォーマンスとスケーラビリティ

Cookie Proxy が、Edge Server Caching Proxy、Everyplace Server、およびバックエンド・サーバーでセットアップされると、物理的アーキテクチャーがパフォーマンスとスケーラビリティの両方に重要な影響を持つようになります。スループットとセキュリティの向上のために、Cookie Proxy を含む Edge Server Caching Proxy は、Everyplace Server の他のコンポーネントとは別のマシンにインストールすべきです。Edge Server Caching Proxy のパフォーマンスとスケーラビリティについては詳しくは、これらのプログラムのそれぞれのガイドブックを参照してください。

Secure Socket Layer (SSL) の使用は、要求ごとの単位時間およびターンアラウンド・タイムあたりに処理される HTTP 要求数に影響を与える 1 つの要因です。一般に、SSL 処理のオーバーヘッドは、Cookie Proxy が処理する cookie のオーバーヘッドよりも大きくなります。

メモリーの最適な使用のためには、Cookie Proxy の構成ファイル *jpas.conf* で定義される *MaxSession* を、見積ユーザー・アクセス数よりも大きくすべきではありません。

システムを構成するときは、パフォーマンスとスケーラビリティに加えて、セキュリティも考慮しなければなりません。セキュリティの考慮事項については、4 ページの『セキュリティ考慮事項』を参照してください。

サポートされるデバイス

NTT DoCoMo の i-mode 電話。

サポートされるマークアップ言語

Cookie Proxy は Shift-JIS コードでのコンパクト HTML のネイティブ・サポートを持っています。WebSphere Transcoding Publisher を使用する場合は、他のマークアップ言語をサポートすることができます。Transcoding Publisher については、<http://www.jp.ibm.com/software/network/transcoding/library.html> を参照してください。

セキュリティー考慮事項

高度な機能を持つ Web ブラウザーのある強力なパーソナル・コンピューターを使用するハッカーの攻撃からシステムを守るには、Cookie Proxy を含むプロキシ・サーバーを専用回線網を介して直接に NTT DoCoMo ゲートウェイに接続すべきです。これにより、i-mode 電話のみがこれらの Web アプリケーションにアクセスできるようになります。

制限

Cookie Proxy は Java アプリケーション (iappli) をサポートしていません。

第2章 Everyplace Cookie Proxy のインストールおよびアンインストール

ハードウェア要件

Everyplace Cookie Proxy は、各プラットフォームについて以下のハードウェアで使用できます。

AIX システムの場合 : IBM RS/6000®

Solaris システムの場合: SPARC™ または UltraSPARC

他のコンポーネントが別々のマシンにインストールされているときは、Everyplace Cookie Proxy および Edge Server Caching Proxy サーバー・マシンには少なくとも 512 メガバイトのメモリーを使用することをお勧めします。

ハードウェア要件について詳しくは、「*WebSphere Edge Server for Multiplatforms—Web Traffic Express 使用者の手引き*」を参照してください。

ソフトウェア要件

Cookie Proxy には以下のソフトウェアが必要です。

AIX システムの場合:

- AIX® 4.3.3
- WebSphere Edge Server Caching Proxy バージョン 1.0.3 (Web Traffic Express 3.6)

Solaris システムの場合:

- Solaris バージョン 7 または 8 (32 ビットのみ)
- WebSphere Edge Server Caching Proxy バージョン 1.0.3 (Web Traffic Express 3.6)

Edge Server Caching Proxy の要件については、「*WebSphere Edge Server for Multiplatforms—Web Traffic Express 使用者の手引き*」を参照してください。必要な更新に関する最新情報については、インストール・パッケージにある README ファイルを読んでください。

必要なディスク・スペース

Edge Server Caching Proxy および Cookie Proxy のソフトウェアおよび文書を管理するには、50 メガバイトの空きディスク・スペースに加えてログ用のスペースが必要になります。詳しくは、「*WebSphere Edge Server for Multiplatforms - ご使用に際して*」を参照してください。

Everyplace Cookie Proxy のインストール

Cookie Proxy のインストールを始める前に、README ファイルを必ずお読みください。README ファイルは、WebSphere Everyplace Server の 10 番目の CD-ROM にあります。英語版は (cd_root)/jpas/readme_En.html、日本語版は (cd_root)/jpas/readme_Ja.html です。

AIX システムの場合

Cookie Proxy を CD-ROM からインストールするには、以下のステップに従ってください。

1. root としてログインします。
2. 14ページの『プロキシの始動および停止』 の手順で、Edge Server Caching Proxy を停止します。
3. 10 番の CD を CD ドライブに入れます。
4. CD をマウントします。

たとえば、次のコマンドを入力します: `mount -rv cdrfs /dev/cd0/mnt`

5. 現行ディレクトリーを (cd_root)/jpas/aix に変更します。
6. `./install.sh` を入力してインストール・シェル・スクリプトを実行します。
7. 9ページの『第3章 プロキシの管理および構成』 の手順で、Cookie Proxy の構成ファイル `/etc/jpas.conf` を変更します。

Solaris システムの場合

Cookie Proxy を CD-ROM からインストールするには、以下のステップに従ってください。

1. root としてログインします。
2. 14ページの『プロキシの始動および停止』 の手順で、Edge Server Caching Proxy を停止します。
3. 10 番の CD を CD ドライブに入れます。
4. 現行ディレクトリーを (cd_root)/jpas/solaris に変更します。
5. `./install.sh` を入力してインストール・シェル・スクリプトを実行します。
6. 9ページの『第3章 プロキシの管理および構成』 の手順で、Cookie Proxy の構成ファイル `/etc/jpas.conf` を変更します。

Everyplace Cookie Proxy のアンインストール

注: Everyplace Cookie Proxy をアンインストールすると、Edge Server Caching Proxy の構成ファイル (`ibmproxy.conf`) は、Everyplace Cookie Proxy をインストールしたときに保管された構成ファイルで置換されます。

AIX システムの場合

製品 CD で Cookie Proxy をアンインストールするには、以下のステップに従ってください。

1. root としてログインします。
2. 14ページの『プロキシの始動および停止』 の手順で、Edge Server Caching Proxy を停止します。
3. 10 番の CD を CD ドライブに入れます。
4. CD をマウントします。

たとえば、次のコマンドを入力します: `mount -rv cdrfs /dev/cd0/mnt`

5. 現行ディレクトリーを `(cd_root)/jpas/aix` に変更します。
6. `./uninstall.sh` を入力してアンインストール・シェル・スクリプトを実行します。

Solaris システムの場合

製品 CD で Cookie Proxy をアンインストールするには、以下のステップに従ってください。

1. root としてログインします。
2. 14ページの『プロキシの始動および停止』 の手順で、Edge Server Caching Proxy を停止します。
3. 10 番の CD を CD ドライブに入れます。
4. 現行ディレクトリーを `(cd_root)/jpas/solaris` に変更します。
5. `./uninstall.sh` を入力してアンインストール・シェル・スクリプトを実行します。

第3章 プロキシの管理および構成

Edge Server Caching Proxy および Everyplace Cookie Proxy は起動時にそれぞれの構成を読み取ります。構成データがセッション中に更新された場合、更新を有効にするには、Edge Server Caching Proxy を停止して再始動する必要があります。

Edge Server Caching Proxy の構成

Edge Server Caching Proxy は、フォワード、リバース、または透過プロキシとして構成することができます。Cookie Proxy を使用するには、Edge Server Caching Proxy をリバース・プロキシとして設定する必要があります。手順については、「*WebSphere Edge Server for Multiplatforms—Web Traffic Express 使用者の手引き*」のプロキシ設定を説明する章で解説します。

さらに、以下のステップが必要です。

1. マッピング規則の設定

ユーザーが Web サーバーのホスト名を知ることなく Cookie Proxy を介して Web アプリケーションにアクセスできるようにするには、Edge Server Caching Proxy の構成ファイル *ibmproxy.conf* の「マッピング規則」セクションでプロキシ・ディレクティブを指定します。

```
Proxy<Cookie Proxy のパス> < Cookie Proxy のパスにマッピングされるバックエンド・サーバーの名前とパス>
```

リバース・プロキシのステートメント例:

Proxy	/*	http://wps.yamato.ibm.com/*
-------	----	-----------------------------

2. キャッシング・オフの設定

Web ブラウザーがアクセスのたびにフレッシュ・データを得るようにするには、以下のように、Edge Server Caching Proxy の構成ファイルで *ibmproxy.conf* を編集することによって、キャッシングを使用不可にします。

```
Caching OFF  
CacheMemory Comment out
```

Cookie Proxy のインストール・プログラムはこの変更を自動的に行います。

3. プラグイン機能の名前の設定

以下のステートメントを Edge Server Caching Proxy の構成ファイル *ibmproxy.conf* の API ディレクティブに組み込んでください。

```
Serverlnit /opt/IBMJPAS/lib/libjpas.so:Jpaslnit [<Cookie Proxy の構成ファイル名>]
```

PreExit /opt/IBMJPAS/lib/libjpas.so:JpasPreExit

Transmogrifier /opt/IBMJPAS/lib/libjpas.so:JpasTOpen:JpasTWrite:JpasTClose:
JpasTError

ServerTerm /opt/IBMJPAS/lib/libjpas.so:JpasTerm

注: これらのステートメントはそれぞれ、ここでは改行されていても、実際は改行せずに入力する必要があります。

Cookie Proxy の構成ファイルの名前が **Jpaslnit** の後に指定されていない場合は、以下のデフォルト・ファイル・パス */etc/jpas.conf* が使用されます。これらのステートメントは、Cookie Proxy のインストーラーによって自動的に *ibmproxy.conf* に追加されます。構成ファイルに別の名前を付けたい場合は、**Jpaslnit** の後の引き数を手作業で変更してください。指定された名前の下に Cookie Proxy の構成ファイルが表示されない場合、初期化は失敗し、Cookie Proxy は活動化されません。

Everyplace Cookie Proxy の構成

Edge Server Caching Proxy が始動すると、Cookie Proxy はその構成ファイル *jpas.conf* を読み取ります。このファイルには下の表に示されている定義が含まれています。キーは大文字小文字が区別されます。

キー	説明	必須またはデフォルト値	例
ServerId	Cookie Proxy サーバー ID。任意の文字 (a-z) および数字 (0-9)。Cookie Proxy サーバーがクラスターとして構成されている場合は、それぞれが固有なサーバー ID を持っていなければなりません。	必須	ServerId = a
ProxyHostname	Cookie Proxy サーバーのホスト名。Cookie Proxy サーバーがクラスターとして構成されている場合は、クラスター名を指定しないでください。	必須	ProxyHostname = www.jpas.ibm.com
BackendHostname.n	バックエンド・サーバーのホスト名。“n” は、0 からバックエンドのホストの最大数 63 までの任意の数値です。	必須	BackendHostname.0 = www0.jpas.ibm.com BackendHostname.1 = www1.jpas.ibm.com
AssumeHTML	応答にコンテンツ・タイプ・ヘッダー・フィールドがなく、Cookie Proxy が、コンテンツ・タイプが “text/html” であることを想定する必要がある場合は on にします。	off	AssumeHTML=on
Clustering	Cookie Proxy サーバーがネットワーク・ディスパッチャーを持つクラスターとして構成されている場合は on にします。	off	Clustering = on
DefaultRealm	バックエンド・サーバーで使用されるレルム・ストリング。指定された場合は、認証ヘッダー内の基本認証ストリングに影響を与えます。	オプション	DefaultRealm = mycompany.com

キー	説明	必須または デフォルト値	例
MaxSession	Cookie Proxy が一時点で保持できるセッションの最大数。	200	MaxSession = 45
SessionTimeout	セッションの間にユーザーが何の処置も行わない場合、セッションが自動的に終了するまでの時間間隔(分)。最小値は 5 です。	15	SessionTimeout = 25
CleanupInterval	セッション・テーブルのクリーンアップ間での時間間隔(分)。最小値は 1 です。	5	CleanupInterval = 45
MaxCookie	セッションあたりの cookie の最大数。	20	MaxCookie = 10
AddHeader.n.name AddHeader.n.value	Cookie Proxy がメッセージをバックエンド・サーバーに渡すときに追加される、ヘッダー・フィールド名および値。“n” はそれぞれ 0 から最大 15 までの数を表します。 設定は、名前と値が同時に指定された場合にのみ有効です。	オプション	AddHeader.0.name = Accept-Encoding AddHeader.0.value = compress, gzip
UserAgent.n	サポートされるユーザー・エージェントのリスト。“n” は 0 から始まる整数を示します。	必須	UserAgent.0 = DoCoMo/1.0/P501i UserAgent.1 = DoCoMo/1.0/D502i
LoginPath	ログイン要求パス。これは、ログイン用の URL の一部として使用されます。存在していないパスを指定してください。	必須	LoginPath = / login.jpas
LogoutPath	ログアウト要求パス。これは、ログアウト用の URL の一部として使用されます。	オプション	LogoutPath = / logout.jpas
HomepageUrl	ホーム・ページ URL。このページは、Cookie Proxy が、ログインまたはログアウト・プロセスの後でジャンプする先のページを決定できないときにオープンします。	必須	HomepageUrl = /welcom/index.html
LoginForm	Cookie Proxy ログイン・フォームのある場所を示すログイン・フォーム名。	必須	LoginForm = /opt/IBMJPAS/etc/Ja_JP/login.html
ErrorPage.General	「一般エラー」用の HTML ファイル・パス。これは、Cookie Proxy がエラーを検出したときに使用されます。	必須	ErrorPage.General = /opt/IBMJPAS/etc/Ja_JP/error.html
ErrorPage.Busy	「ビジュー」用の HTML ファイル・パス。これは、Cookie Proxy がビジュー状態にあるときに使用されます。	必須	ErrorPage.Busy = /opt/IBMPAS/etc/Ja_JP/error_busy.html
ErrorPage.BadReq	「無効要求」用の HTML ファイル・パス。これは、Cookie Proxy が Web ブラウザーからの無効な入力を検出したときに使用されます。	必須	ErrorPage.BadReq = /opt/IBMJPAS/etc/Ja_JP/error_badreq.html
TraceLevel	次のトレース・レベルのいずれか: 0 = エラーのみ 1 = エラーおよび通知 2 = エラー、通知、およびその他の情報 3 = すべて (エラー、通知、その他の情報、およびデバッグ)	0	TraceLevel = 3

キー	説明	必須または デフォルト値	例
Syslog	SYSLOG 機能を Cookie Proxy トレースで使用可能にするかどうか。これが on になっていると、トレース・メッセージが syslogd デーモンに送信されません。	off	Syslog = on
TraceFile	トレース・ファイルの絶対パス名。これは、Syslog パラメーターへの追加で使用されます。	Syslog = off の場合は必須	TraceFile = /var/jpas/logs/jpas.log

- 各パラメーターは、構成ファイルに 『key=value』 の形式で指定します。 『=』 の前後にはスペースを入れることができます。
- 『#』 で始まる行はコメントと見なされます。
- 1 ステートメントにつき、改行を含めて 255 文字まで指定できます。
- 必須パラメーターが欠落している場合、初期化は失敗し、Cookie Proxy は活動化されません。

構成ファイルの例として、 `/opt/IBMJPAS/etc/jpas.conf` (`/etc/jpas.conf` によってシンボリック・リンクされています) を参照してください。

ログインのカスタマイズ

ユーザーが認証が必要なページを開こうとしたが、セッションが活動化されていない場合は、ユーザーがログインすることを要求するログイン・フォームがユーザーの Web ブラウザーに表示されます。

ログイン・フォームは、Cookie Proxy の構成ファイルにある LoginForm パラメーターに従って使用可能になっていなければなりません。このフォームがない場合は、初期化は失敗し、Cookie Proxy は活動化されません。

HTML ログイン・フォームは、以下のストリングを含んでいなければなりません。

- method= 『post』 action= 『\$\$\$LOGINPATH\$\$\$;ZZLOGIN』 (FORM タグ)
- name= 『jpasuid』 maxlength= 『16』 (FORM 定義の INPUT タグ)
- name= 『jpaspw』 maxlength= 『16』 (FORM 定義の別の INPUT タグ)

サンプルのログイン・フォームを以下に示します。

```
<html>
<head>
<META http-equiv= 『Content-Type』 content= 『text/html; charset=shift_jis』 >
</head>
<body>
<form method= 『post』 action= 『$$$LOGINPATH$$$;ZZLOGIN』 >
User ID:<br>
<input type= 『text』 name= 『jpasuid』 size= 『14』 maxlength= 『16』 ><br>
Password:<br>
<input type= 『text』 name= 『jpaspw』 size= 『14』 maxlength= 『16』 ><br>
<input type= 『submit』 value= 『Login』 >
</form>
</body>
</html>
```

カスタマイズ・エラー・メッセージ

3 つのタイプのエラー・メッセージが HTML ファイルに書き込まれます。メッセージは Web ブラウザーに表示されます。

- 『JPAS200E 一般サーバー・エラー』
- 『JPAS300E サーバー・ビジー』
- 『JPAS400E 無効要求』

『JPAS200E 一般サーバー・エラー』メッセージ・ファイルは、Cookie Proxy がシステム・エラーなどのエラーを検出したときに使用されます。本文の最初の行から『JPAS200E』を削除しないでください。これはエラー報告の際に使用されます。このファイルを置く場所は、構成ファイルの **ErrorPage.General** パラメーターに定義されています。『JPAS200E 一般サーバー・エラー』・メッセージ HTML ファイル /opt/IBMJPAS/etc/Ja_JP/err_general.html の例は以下の通りです。

```
<html>
<head>
<META http-equiv=『Content-Type』 content=『text/html; charset=shift_jis』 >
</head>
<body>
Error:JPAS200E<br>
Cookie Proxy がエラーを検出しました。プロバイダーの管理者に連絡してください。
</body>
</html>
```

『JPAS300E サーバー・ビジー』エラー・メッセージ・ファイルは、Cookie Proxy がビジー状態にあるときに使用されます。たとえば、受け取ったセッション確立要求が多すぎるときに『サーバー・ビジー』状態になります。本文の最初の行から『JPAS300E』を削除しないでください。これはエラー報告の際に使用されます。このファイルを置く場所は、構成ファイルの **ErrorPage.Busy** パラメーターに定義されています。『JPAS300E ビジー』・エラー・メッセージ HTML ファイル /opt/IBMJPAS/etc/Ja_JP/err_busy.html の例は以下の通りです。

```
<html>
<head>
<META http-equiv=『Content-Type』 content=『text/html; charset=shift_jis』 >
</head>
<body>
Error:JPAS300E<br>
サーバーは現在ビジーです。しばらくしてから再試行してください。
</body>
</html>
```

『JPAS400E 無効要求』エラー・メッセージ・ファイルは、侵入者が作成した無効なセッション ID などの、Web ブラウザーからの無効な入力を検出したときに使用されます。本文の最初の行から『JPAS400E』を削除しないでください。これはエラー報告の際に使用されます。このファイルを置く場所は、構成ファイルの **ErrorPage.BadReq** パラメーターに定義されています。『JPAS400E 無効要求』エ

ラー・メッセージ・ファイル (HTML) /opt/IBMJPAS/etc/Ja_JP/err_badreq.html の例は以下の通りです。

```
<html>
<head>
<META http-equiv=『Content-Type』 content=『text/html; charset=shift_jis』 >
</head>
<body>
Error:JPAS400E<br>
予期しない要求が検出されました。
</body>
</html>
```

Everyplace Cookie Proxy の使用により Web アプリケーションへのアクセスを得る

ホストへのアクセスを得るために使用するホスト名は URL の一部であり、バックエンド・サーバーの名前ではなく Cookie Proxy サーバーの名前です。たとえば、Cookie Proxy のホスト名は次のようになります。

www.jpas.ibm.com

バックエンド WebSphere Portal Server のホーム・ページは次の通りです。

http://wps.yamato.ibm.com/commerce/index.html

また、Edge Server Caching Proxy 構成ファイル (ibmproxy.conf) で定義されたマッピング規則は次の通りです。

Proxy / http://wps.yamato.ibm.com/**

入力すべきマップされた URL は次の通りです。

http://www.jpas.ibm.com/commerce/index.html

プロキシの始動および停止

Edge Server Caching Proxy の始動時に、Cookie Proxy は自動的に初期化されます。始動中になにか問題が発生した場合、Cookie Proxy は活動化されません。ただし、Edge Server Caching Proxy は自動的に停止しません。手動で停止および再始動してください。

Edge Server Caching Proxy がシャットダウンされると、Cookie Proxy もシャットダウンされます。

Edge Server Caching Proxy を始動するには、以下のステップに従ってください。

AIX システムの場合:

1. root としてログインします。
2. **startsrc -s ibmproxy** と入力します。

Solaris システムの場合:

1. root としてログインします。
2. **/etc/init.d/ibmproxy start** と入力します。

Edge Server Caching Proxy を停止するには、以下のステップに従ってください。

AIX システムの場合: **stopsrc -s ibmproxy** と入力します。

Solaris システムの場合: **/etc/init.d/ibmproxy stop** と入力します。

Edge Server Caching Proxy の始動および停止についての詳しくは、「*WebSphere Edge Server for Multiplatforms—Web Traffic Express 使用者の手引き*」を参照してください。

ロギング

Cookie Proxy は、データをシステム・ログ (SYSLOG) に書き込むことで、または (特に Cookie Proxy 用の) ログ・ファイルを書き込むことで、トレース・データを作成するように構成することができます。

SYSLOG を使用したい場合は、**Syslog=on** を Cookie Proxy の構成ファイル *jpas.conf* で指定する必要があります。トレース・データを指定の SYSLOG 出力ファイル */etc/syslog.conf* に記録するには、SYSLOG 出力ファイルをセットアップし、SYSLOG デーモン (syslogd) を実行してください。

エラーを SYSLOG に報告するには、たとえば次の行を */etc/syslog.conf* ファイルに追加してください。

daemon.err [*SYSLOG* 出力ファイル]

各システムの SYSLOG 出力ファイルの場所は以下の通りです。

AIX: */var/adm/name_of_syslog_file*

Solaris の */var/adm/messages*

場合:

SYSLOG ファイルを作成後、次のコマンドで SYSLOG を再始動してください。

```
Kill -HUP `cat/etc/syslog.pid`
```

Cookie Proxy 自体のログ・ファイルを使用したい場合は、Cookie Proxy の構成ファイル *jpas.conf* で **TraceFile** パラメーターを指定してください。たとえば **TraceFile=/var/jpas/logs/jpas.log** を指定した場合は、“nobody” クラス・ユーザーによる書き込みを許可するように */var/jpas/logs* を設定する必要があります。指定のファイル名の名前と拡張子の間に、自動的に日付が挿入されます。たとえば 2001 年 3 月 1 日は、*jpas 20010301.log* になります。

SYSLOG と Cookie Proxy 自体のログ・ファイルの両方を使用できます。ただしこの場合、これら 2 つの出力ファイルのトレース・レベルを個々に制御することはできません。**TraceLevel** パラメーターが両方の出力ファイルに対して効力を持ちます。これらのパラメーターについて詳しくは、10ページの『Everyplace Cookie Proxy の構成』を参照してください。

Solaris ユーザーのための注意事項:

LogToSyslog パラメーターを `ibmproxy.conf` ファイルに指定した場合、Edge Server Caching Proxy はメッセージを SYSLOG に書き込みます。このときメッセージ機能は『user』、ID は『ibmproxy』になります。ただし、Cookie Proxy が SYSLOG にメッセージを書き込むとき、メッセージ機能は『daemon』に、ID は『JPAS』に変わります。

トラブルシューティング

Web ブラウザーでのエラー・メッセージ

問題が発生した場合、4 タイプのエラー・メッセージが Web ブラウザーに表示されます。

メッセージ ID	デフォルト・メッセージ
JPAS100E	アクティブではありません。このメッセージはカスタマイズできません。
JPAS200E	Cookie Proxy がエラーを検出しました。プロバイダーの管理者に連絡してください。
JPAS300E	サーバーは現在ビジーです。しばらくしてから再試行してください。
JPAS400E	予期しない要求が検出されました。

メッセージ JPAS200E、JPAS300E、および JPAS400E をカスタマイズするには、13ページの『カスタマイズ・エラー・メッセージ』を参照してください。

「JPAS100E Cookie Proxy: アクティブではありません」エラー・メッセージ

エラー・メッセージ『JPAS100E Cookie Proxy: アクティブではありません』は、Cookie Proxy の活動化が失敗したことを意味します。このエラーが発生した場合は、SYSLOG か Cookie Proxy 自体のログ・ファイル、またはその両方を見て、エラー・メッセージを探してください。どちらのログ・ファイルにも何も書き込まれていない場合は、Edge Server Caching Proxy の ErrorLog ファイルを見てください。Edge Server Caching Proxy のロギングの構成については、「WebSphere Edge Server for Multiplatforms—Web Traffic Express 使用者の手引き」に記されています。トレース・ログには、メッセージ『!!!! JPAS 初期化エラー !!!!!』の直前に、次のいずれかのエラー・ステートメントが示されることがあります。Cookie Proxy を正常に始動するために必要な処置を行ってください。

- 構成ファイルを読み取ることができません
 - Cookie Proxy の構成ファイル (`jpas.conf`) が存在しません。 `jpas.conf` ファイルを `ibmproxy.conf` の **ServerInit** ステートメントが指定する場所 (9ページの『Edge Server Caching Proxy の構成』を参照)、またはデフォルト・ロケーション (`/etc/jpas.conf`) に置いてください。次に、Edge Server Caching Proxy を停止して再始動します。
 - Cookie Proxy の構成ファイルは存在しますが、読み取ることができません。“nobody” クラス・ユーザーがこのファイルを読み取れるように、ファイル許可を変更して、Edge Server Caching Proxy を停止および再始動してください。

- <パラメーター名>が指定されていません
 - 必須パラメーターが構成ファイルにありません。*jpas.conf* ファイルを編集して、必要なすべてのパラメーターを指定し、Edge Server Caching Proxy を停止および再始動してください。

特記事項

本書において、日本では発表されていない IBM 製品（機械およびプログラム）、プログラミングまたはサービスについて言及または説明する場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品、プログラムまたはサービスの操作性の評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM および他社は、本書で説明する特許権（特許出願中のものを含む）、商標権、または著作権を所有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権、使用权等の許諾については、下記の宛先に、書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3 丁目 2-31
AP 事業所
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

本書に対して、周期的に変更が行われ、これらの変更は、文書の次版に組み込まれます。IBM は、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

AP 事務所
P.O. Box 12195
3039 Cornwallis Road

Research Triangle Park, NC 27709-2195
USA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBMより提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手してください。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の損害賠償請求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は現れない場合があります。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

AIX
Everyplace
IBM
RS/6000
WebSphere

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標または登録商標です。